

## 北海道総合地質学研究センターの設立にあたって

前田 仁一郎 (北海道総合地質学研究センター)

特定非営利活動法人“北海道総合地質学研究センター”(Nonprofit Organization “Hokkaido Research Center of Geology”: HRCG) は、北海道内外の大学や研究機関、教育機関、自治体、企業などで地質学の研究・教育・実務に従事し、退職の時期を迎えた(+近いうちに迎える)団塊の世代10数名によって2016/3/1に発足した。HRCGの設立の動機は創造的活動(研究)を今後も意欲的に継続したいという意志と、これまでに培ってきた地質学に関する専門性は、いわば永年の社会的な投資によって蓄積された公的財産であるから、可能な限り今後も社会的に活用されることが望ましい(社会貢献)という考えの両方を効果的に達成しようと考えたからである。大学を退職した研究者が個人的に「〇〇研究室」などと名乗ることはあったが、HRCGのように比較的多くの人間があつまり、法人格を取得して研究などの創造的活動を行うための拠点を作ろうとする例は、地質学の分野では稀な例であるかもしれない。

大学などと違い、研究費もハードもソフト資産も皆無なのに、退職者が集まってこんなことをするのにどういう意味があるのだろうか?その回答は至極簡明である。退職後は(理想的には)であって現実はずしもそうではないが)心からやりたいこと、心地よいことをやるために自分の時間を使うことができる、純粋に知的好奇心に従って研究を行ない、ゆっくりと考え、考えることを愉しむことができる、HRCGはそういった環境なのである。逆に言うと退職するまではそれぞれの所属組織の中でほめられたり、評価されたり、あるいは叱られないようにすることが必要であった。例えば論文数を増やすためには熟慮せずに“拙速”に書くべしと指導する大学教員さえいる(ISBN978-4121504807)。そしてその結果、世界中でほとんど全く読まれることのない膨大な論文が、膨大な公的経費を浪費して生産されているという実態もあるし、発表される論文の相当数が再現性を欠いているという指摘もある(ISBN978-4000296472; Science v 348, p 1422, 2015; Nature v 533, p 452, 2016)。また大学では多くの研究費を獲得することが正の評価に100%直結するから、そのこと自体が目的化される。つまり“研究するために研究費を”では無く、“研究費を獲得するために研究を”ということになりがちである。研究課題は論文化が容易なもの、研究費を獲得しやすいもの、危機感を煽るセンセーショナルなものに向かうのは必然的でさえある。Obokata事件を含む多くの研究不正(捏造・改竄・盗用)+研究費の不正使用の根源はこの辺りにある。地球科学のコミュニティに研究不正がどの程度蔓延しているのか判らないが、研究費獲得のための(場合によっては自著の売り上げを増やすための)誇大広告を探することはそんなに難しくはない。この状態を科学の危機と呼ぶ人もいる(ISBN978-4087207828)。しかし現状では大学の中の個人がそれに反旗を翻すのはほとんど完全に不可能であるから、この傾向は今後さらに強化されるに違いない。その結果、科学と科学者とそのコミュニティが納税者の信頼を失う日がこの先やって来るかもしれないと僕は危惧している。どうも大学は必ずしも理想的な研究環境ではない(orなくなる)のかもしれない。

さて地質学も我々が学生・院生であった頃に比べると激しく変化した。広大な地域で何ヶ月もテントで野外調査を行い、膨大な試料を採取し、膨大な薄片を作り.. という研究スタイルは絶滅間近である。現在の野外地質学は先行研究の成果に基づくピンポイント地質学、せいぜいルートマップ地質学である。先行研究が完璧であるはずもないので、このままでは“縮小再生産”は避けられない。研究課題も著しく細分化されたものが主流である。だから北海道の広域的・総合的な地域地質学を担える大学や研究機関がこ

れからも存在し続けるという保証はないように思われる。HRCG の存在意義の 1 つはそこにあるかもしれない。さて美術や音楽の世界では、それぞれ広い視野と高度の知識をもった批評家と呼ばれる職業人が存在する。一方科学の世界ではそのような職業人はほとんど存在しない。Obokata 事件の際には何人かのジャーナリストがそれに近い役割を果たした (ISBN978-4163901916) が、地質学や地球科学にはほとんど皆無である (例外的と云って良いか? 地震学の研究者による ISBN978-4575303438)。研究費に縛られない HRCG がそのような役割の一旦を担うことが可能になれば大変うれしい。さて、上に述べたような状況のなか、野外地質学の将来はどうなるのだろうか。古生物学者と化石マニア、天文学者と天文マニアのように地質学者と地質マニアといった差別化の時代がやってくるのだろうか。それとも丸ごと消滅してしまうのだろうか。HRCG の基盤的テーマである。